このひと

日本分析化学会会長に就任される

早下　隆士　氏

（Takashi HAYASHITA
上智大学理工学部教授）

1958年3月6日生。1980年九州大学工学部卒業，1985年同大学院工学研究科博士後期課程修了，工学博士（九州大学）。同年神奈川大学工学部助手，1989年米国テキサス工科大学博士研究員，1992年佐賀大学理工学部助教授，1997年東北大学大学院理学研究科助教授，2005年上智大学理工学部教授，2011年上智大学理工学部長，2014年～2017年上智大学学長。1993年本学会奨励賞，2003年シクロデキストリン学会奨励賞，2007年日本イオン交換学会学術賞，2014年シクロデキストリン学会学会賞，2014年日本イオン交換学会学会賞，2020年本学会学会賞。2018年本学会副会長，2019年本学会関東支部長，日本イオン交換学会会長，2020年ホスト・ゲスト-超分子化学研究会会長，シクロデキストリン学会会長。

早下先生，日本分析化学会長就任おめでとうございます。ご本人がめでたいとお感じかどうかは別として，困難な時期に最も適切な方が会長に選ばれたことを，大変喜ばしく思っております。多くの会員の方々に，この点ご賛同いただけるものと存じます。

早下さん（以降，普段通り「さん」付けで書かせていただく）と初めて会ったのは，1988年の暮れか89年の始め頃だったと記憶している。当時，早下さんは神奈川大学の助手をされていて，アメリカのTexas Techにポスドクとして赴任するに際し，Texas Techのことや大学のあるLubbockについて話を聞きたいとコンタクトがあった。私は，その直前1988年の10月までTexas TechのDasgupta教授の研究室でポスドクをしていたので，最新の情報が得られると期待されてのことだったと思われる。早下さんは，九州大学で上野景平，高木誠両先生に師事された，機能性分析試薬開発の本流とも言うべき分野を研究フィールドにしていて，一方私は当時専らイオンクロマトグラフィーを研究していたので，同級生でありながら（今となっては，頭髪の量に差はあるが・・・）それまで全く接点がなかった。Texas Techでの所属研究室も異なり，早下さんはクラウンエーテルなどのイオン認識の専門家であるBartsch教授の研究室に滞在した。Texas Techは決して有名大学ではなかったし，当時日本人にとってはなじみの薄い大学だった。そのようなマイナーな大学の同じデパートメントの研究室に，時を前後して留学することになったことに縁を感じた。

早下さんが日本に帰って来られてからは，主に学会などの機会によく語らうようになり，30年来親しくさせていただいている。また，Texas Techにはその後多くの日本人研究者が留学しており，早下さんと私が音頭をとって，ICASやPacifichemなどの国際会議の際に，Bartsch教授やDasgupta教授を交えて同窓会のようなものを何度か開催した。早下さんがBartsch教授から厚い信頼を得ており，また他国からの同窓生からも慕われていることが良くわかった。

早下さんが上智大学の教授に着任されたとき，私は既に東京工業大学に在籍していた。互いに異なる地域を巡って，最終的に東京に落ち着くことになり，学会活動でも協力する機会が増えた。2013年の暮れに関東支部の使者として早下さんと二人で山梨大学に出かけ，2015年の討論会の実施をお願いした。その帰りの電車の中で，「もしかすると学長になるかもしれない」と打ち明けられ，正直驚いた。適任だと思ったが，分析化学会の仕事を頼めなくなるというのが個人的に一番のショックであった。本来であればもっと早く分析化学会の中心的な役割を担っていただくべきところ，最近まで公務があまりにご多忙で学会の要職をお願いできる状況にはなかったわけである。学長を退かれ，やっと早下会長として活躍していただく機会が巡ってきた。

さて，日本分析化学会は未曽有の危機的状況にあると言わざるを得ない。前々期会長を務めた私の責任は逃れられず，早下さんに事態の収拾をお願いすることになるのは誠に心苦しく，申し訳ない。とりわけ深刻なのは，理事会が決めたことが実行されない体質と，経営に余裕があり，会員が一万人に達しようとしていた過去を引きずっている点である。昨年急逝された内山会長のご下命で，私が主査となり会員数3000人を想定した日本分析化学会の運営についてタスクフォースを結成して，理事会に多くの案を諮問した。理事会では承認され，その方向で進めることが決定されたが，この中で実行された，あるいは今後実行されそうなものはわずかである。各委員会や事業担当者は，学会のために頑張ってくださっている。しかし，現場には危機感が十分に伝わっておらず，全体像が見えている執行部との間に乖離が生じている。つまり情報の共有不足が根本的原因の一つである。改革には種々の軋轢が予想されるが，このような時にこそ早下さんの高いマネジメント能力と人間力に裏打ちされた包容力がものを言うに違いない。

日本分析化学会，そして学術としての分析化学を次の世代，またその次に引き継ぐために今が正念場です。早下会長の下，皆でアイデアを出し合い，この危機を乗り切りましょう。早下さんなら明るい未来をつかみ取れると信じています。

〔東京工業大学理学院化学系　岡田哲男〕

会長就任にあたりまして

早　下　隆　士

令和3年6月に開催されました日本分析化学会総会・理事会に於いて，2021・2022年度の会長職を拝命致しました上智大学の早下隆士です。本学会は1952年に設立され，2021年で設立70周年を迎えました。私自身は博士後期課程までを九州大学において，上野景平教授（1985年度本会会長），高木　誠教授（2001年度本会会長）の下で学び，その後，神奈川大学，佐賀大学を経て，東北大学で助教授として寺前紀夫教授（2013・2014年度本会会長）の下で研究を行って参りました。本学会の重鎮の多くの先生方のご教示の下に学ぶと同時に，先生方の本学会に対する真摯な思いを目の当たりにした長い年月を経て会長職を拝命致しますことは，大変光栄であるとともに，よりいっそう身の引き締まる思いでおります。

さて2018年に当時の岡田哲男会長のもとで副会長に就任しましたおり，学会の財務状況が危機に瀕していることを知りました。正直に申しあげれば，本学会はいつ潰れてもおかしくない状況にありました。学会の運営の健全化を目指すために2019年からは，会長に就任された内山一美先生の下で副会長・業務執行理事として，岡田前会長の協力を得ながら，抜本的改革に取り組んで参りました。誠に残念ながら2020年8月に内山会長は不慮の事故により急逝されましたが，亡くなる前夜遅くまで学会改革について話し合いを行っておりました。残りの任期を引き継いで会長に就任頂いた金澤秀子先生にもその後，ご支援を頂き，会員の規模に見合った本来あるべき学会の姿となるよう体制作りを進めております。

具体的には，岡田前会長を中心とするタスクフォースを2019年に設置し，その答申に基づく改革を不退転の覚悟で進めています。少子化に伴う昨今の現状を鑑み，近い将来の会員3000名でも対応できる学会の運営体制を構築すべく，1）職員人件費の大幅削減，2）本部業務の抜本的見直し，3）研究懇談会や年会，討論会などの各委員会による自主運営の実施，4）「ぶんせき」誌の電子化，*X-ray Structure Analysis Online*の廃止，*Analytical Sciences*誌の編集機能を残した形での外部委託化，5）会員管理システムの新構築による各種業務の効率化を進めております。本改革案は，2020年度理事会にても承認され，すでに各委員会への説明も実施していますが，会員の皆様には機会あるごとに，抜本改革の重要性をますます訴えて行きたいと考えています。この改革は，私の会長任期の間に何としても実現すべき課題です。

現時点で，これらの改革は皆様の努力により少しずつですが形に表れ始めており，2018年と2019年に計上した大幅な赤字は，2020年度には改善の兆しが見えてきました。コロナ禍において，事業収入も大幅に減りましたが，それ以上に会議費など支出の削減が出来たことも一つの要因です。ポストコロナでは，以前の学会運営に戻すのではなく，コロナ禍で学んだオンラインによる事業や会議の効率化を積極的に導入し，新しい運営体制を作り出すことが非常に重要です。

当学会の会員である意義は，何と言っても分析化学に関連する最新研究について，分析化学討論会や年会に参加し，研究発表はもちろんのこと，分析化学技術に関する意見交換を行えることや新しいアイデアをいち早く収集できることにあります。それに伴い，産官学の様々な会員同士の交流はより活発なものになります。本会の機関誌「ぶんせき」で提供する分析化学の最新研究動向に関する情報，入門講座，講義，技術紹介も貴重な情報源です。本部・支部で開催される講習会やセミナーにおいては直接に基礎的な知見を得ることも出来ます。

昨今，多くの学術団体において学会運営が難しくなる中で，和文誌の廃刊があいついでおります。本会では分析化学に関わる研究者・技術者の裾野を広げる意味においても，和文誌「分析化学」の刊行を継続することは重要な役割を担っていると考えております。国際学術誌である*Analytical Sciences*誌は，編集委員会の努力で2020年にはIF 2.1を達成しました。この実績はわれわれの機関誌がアジアの分析化学の基幹をなす英文誌に成長していることの現れです。国際会議に目を向けると，1年延期となり本年10月に台湾で開催されるAsian Conference on Analytical Sciences 2020（ASIANALYSIS 2020），日本で開催予定のInternational Congress on Analytical Sciences（ICAS 2021）があります。この他，全国7支部が主催する交流事業，各種研究懇談会の活動，学会賞，奨励賞，女性Analyst賞などの各賞の発表，次世代の若手研究者を育成するために各支部で行われている若手の会の活動など，本学会は，分析化学に関わる研究者・技術者の有益な交流の場となっていることは間違いありません。

先人の築き上げてきた本学会を，更に魅力的に発展させることは私の常用な使命です。そのためには，安定した財政基盤に基づく学会運営体制への再構築が不可欠です。会員の皆様，理事会構成員，および事務局の皆様のご理解とご協力を，どうぞ宜しくお願い致します。